

明けましておめでとうございます。

『ホツマで読むヤマトタケ物語』がとっても良かったと、読後感想を頂きました。箱根の厳冬の山中で、ウス井のサカを探して、積雪の山中を歩き回って、ずぶ濡れになった靴の冷たさを思い出していました。「この辺だったけど」箱根の山中で案内してくれたお方ともども、途方に暮れていたのを思い出します。

石沢沈雄さんと言う青森県の津軽、藤崎町出身のお方。真面目なお方でした。残念ながら、もう、旅立たれました。石沢さんは、土地柄が塩っ辛いモノが好きでした。山中湖の合宿の際に、わたくしが作った料理に、ドバドバっと醤油をぶっかけていたのを思い出します。高塩分の接種が高血圧に結びつく人は、半数ぐらいだそうです。石沢さんは、塩分を多く摂ると高血圧を引き起こしやすい体質だったのでしょうか。松本善之助先生も高血圧でした。血圧降下剤をずっと服用されていました。

直伝の第一世代は、卒業の時代を迎えて来ています。あの方も、あの方も。これから幾世代を重ねて、これから徐々にラシテは復活をして参りましょう。時間を長く必要とします。長年月で御座います。のんびり取り組みましょう。

ウス井のサカは、『日本書紀』で碓日坂・碓日嶺に誤訳で書かれてしまったため、混乱を呈しました。信濃の地での話のようにされた間違いです。信濃の碓氷峠から海が見えることはありません。信濃で海を見て、姫を懐かしむのはナンセンスです。

石沢さんは、箱根にこそウス井のサカはあるはずだ。と、探索して見つけ出してくれたのです。『地学雑誌』に記載があったとのことでした。『地学雑誌』の創刊は明治22年(1889)に遡ります。当初、『地学雑誌』はおもに地質調査などに携わっていた地質調査所や大学などの専門家によって明治19年(1883)設立された「地学会」の会誌でした。

### 39、ホツマうち ツスウタの アヤ 後半

十二代 景行天皇 38・39・40アヤ、三分割の中の後半

オオトモ・タケヒが「ヒタカミのカミのミチノク」と「ツガルのミチヒコ」に説明します。

ミツルナビ

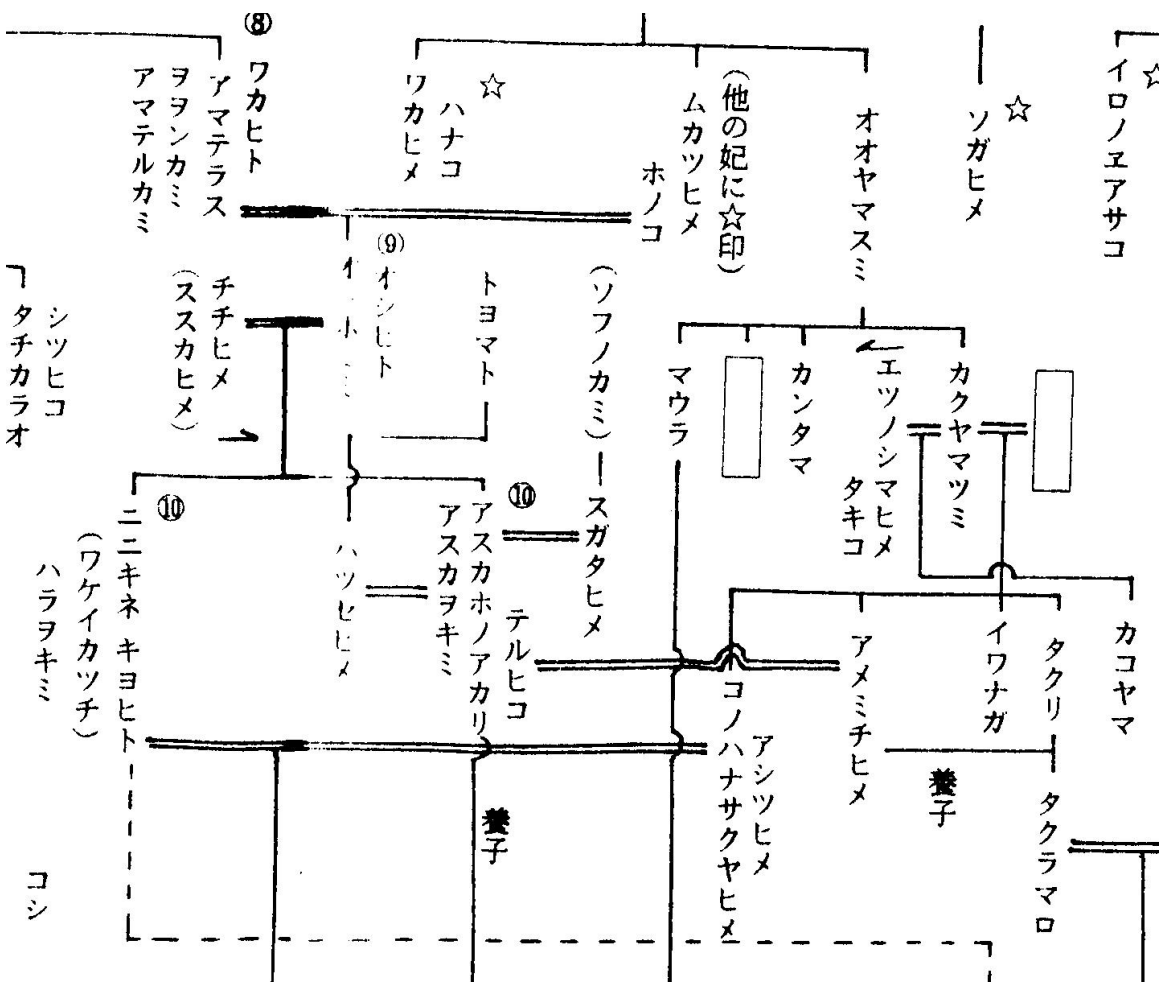
③ タカミムスヒのその子孫が、ヒタカミをおさめて代々続いていました。ヒタカミのカミです。アマテルカミの時に、ヒタカミのカミを任じられたのです。それから代々続いて、当時には14代目になっていたそうです。ヨシロワケ（景行天皇）さんの時代のヒタカミのカミの当主がミチノクと言う人物だったのです。

ツカルはオオナムチの子供のシマツウシの子孫が治めていたと考えられます。カシマタチのちにツガルに開拓地を得て、ツカルキミと呼ばれます。カルキミとも言います。オオナムチの子にシマツウシが居ます。その子孫がシマツのカミと言われるのです。この時の当主はミチヒコと言ったわけです。

九州の島津氏は、シマツウシの子孫とは関係が無いようです。九州島津氏は鎌倉時代ごろの宮崎の地頭が源流のようです。

オオトモ・タケヒはヤマトタケさまの命を受けてミチノクの誤解を解くために遣わされました。タケヒは、ウタのミチにも通じていて教養の高い人物であったのです。ヤマトタ

「イロノエアサコ



ケさまは、安心してナコソのカリミヤにてとどまっておられました。

ツガル・ミチヒコは、弓矢を捨てて抵抗する意思を示してはいませんが、納得はしていないのでした。ヒタカミのカトにての激論。（ヒタカミのカトは、はたして何処でしょうか？）

ミチノクは自国の歴史について自慢します。アマテルカミがその昔学びにも来ていた、尊い国柄だと言うのです。

それなのに、攻め取りに来たのか？ と、なじるのでした。

大きな誤解をとくためにオオトモ・タケヒは説明をします。

39・47 昔、アスカのミヤに仕えるナガスネがフミ（ヨツギを祈るフミ）を盗んだのでした。重大犯罪なので

す。しかし、アスカのキミ（ニギハヤヒ）が臣下ナガスネを処罰しないで傍観したのでした。

それで、世論が沸いたのです。大流行の流行りウタには、

田久△▽き 四☆☆△

のりくたせ ほつまち

中央 〇☆☆ △△△

ひろむ あまも いわふね

（ノリ（法の裁きの鉄槌）を下すべし ホツマチ（ニキネさんからの伝統のミチ）を広めてこそ これこそが あまもイワフネ（正統な祝いの船）です）

世に大流行の流行りウタでした。シホツヲキナ（カナサキさんの子孫）も勧めて言います。

「これはいよいよ時期が熟したようです。行きて平（む）けるべしで御座いますよ」「

タケヒトキミはヤマトウチに立たれたのです。実際の戦闘では苦戦に苦しんでおられました。時に、タカラシタに夢見に立たれたのです。アマテルカミとタケミカツチが夢見の中でお話しになられるのです。タカラシタは、タケミカツチの子孫のようです。ヲランカミ（アマテルカミ）がカシマのカミ（タケミカツチ）にミコトノリなさいます。

「行きて討つべし」と。その答えにカシマのカミは「われ行かずとも、クニムケのツルギ下して（充分でありましょう）」と、クラの中にツルギを立てて、授けました。こうして、タカラシタにツルギを捧げしめたのです。クニムケのツルギのお陰もあって、ヤマトウチは成し遂げられました。タケヒトキミには、キミたるべきイト（糸、心の集まり定まる）が有るからこそヤマトウチの成就でしょう。ここにも、アメ（天地開闢以来）から続くカミ（アマカミの代々）のミコとしての証があるのです。世々に続くアマテルカミの伝統です。

さて、ナンチ（ヒタカミのミチノク）はキミを頂いているわけでない、と言っているんですね。それならば、そもそもコヨミ（暦）はどうしていますか？」

ミチノクは答えます。

「コヨミはイセから買っています」

オオトモ・タケヒは更に追求します。

「コヨミが今の形（閏月で調整を入れる、太陰太陽暦）になったのは、アマテルカミのご尽力によるものでした。ソロ（水田の作物・畑の作物）を植えさせて殖産を図られまして、カテ（食糧）を増やして人々の生命を保たしめて下さいました。アマテルカミはご長命を実現なさいました。国民のためにとみこころ（御心）を砕かれたのです。179万3千年（マサカキ暦での年数）にもお頑張りになられました。今はヒのワチ（太陽のちから）に、アマテルカミのミタマがおわしますのです。子々孫々、特にニキネのミコや、そのご子孫が代々タミ（国民）を守ってきて下さいましたのです。それで、ヒ（太陽）に準えてアマキミの称号を名乗ることになっています。」

あなたは、何世代の間、コヨミのお蔭をもって毎年実りを得てイノチ（生命）を繋いできたのです。未だにそのカエコト（報告）すらもしてないと言っことは、シミ（罪）とも捉えられるのではないのでしょうか？ シミ有のとしたら、その大きさは如何許りか？ と、思われますか？

この筋道、論理に間違いがありますか？」

39・55 この、オオトモ・タケヒの論定に、ヒタカミのミチノクは平伏して一言もありませんでした。クニツコ達も同様です。そして、ヤマトタケさんの滞在なさっているナコソのカリミヤに、まっろう報告をするために向かいます。

39・56 ヤマトタケさんは、元より、征服のために来たわけではありません。外圧から受ける国難に遭遇しての、国家のかたちの確認の仕事です。海を隔てた諸外国の動乱が、我が国に及んで来つつある国難です。ミチノクの不敬もすべてお許しになられました。ミチノクもホツと安堵しました。ナコソから北は、ミチノクの治めるところとして、従来通りにまとめられました。それで、100アガタ(郷)のハツホ(租税)を捧げしむ、と言うことになさいました。ツカルのミチヒコには70アガタのハツホの上納となさいました。

ミツルナビ

③ 「カテフネ」(ハツホを納付するフネ)のこと、28アヤにありました。

|               |          |                                                             |        |
|---------------|----------|-------------------------------------------------------------|--------|
| ナガスネガ ワレオタツレハ |          | この事件が起きるまでは、ミツホ(租税)を上納していたのですね。                             |        |
| イササワガ カレニハラミノ |          | タケヒトさまが「ヤマトウチ」に立たざるを得なかった、その原因の事件。アスス37年に起きたナガスネの文書盗写事件でした。 |        |
| ミコフレテ ホツマヒタカミ |          | ヨシロワケさまの時代、このヒタカミでの激論がなされたのはアスス828年です。                      |        |
| カチフネオ ノホサヌユエニ |          |                                                             |        |
| ホ 28-107      | ① 𐰇𐰺𐰍𐰆𐰏𐰤 | 田 𐰇𐰺𐰍𐰆𐰏𐰤                                                    | 𐰇𐰺𐰍𐰆𐰏𐰤 |

す。形の上では二朝廷並立時代を収束させたタケヒトさまのヤマトウチでした。ですが、カテフネの復活には至っていなかったのです。800年もわだかまりが残されたままだったのです。「イツをヤマトに立てん」とする意味は、この事です。

39・58 その南のヒタチからカツサ、アフ(常陸、上総、安房)は、ミカサカシマ(オオカシマ、『ミカサフミ』の最終編集者)に賜りました。カシマ・ヒテヒコも、カトリ・トキヒコも、イクス・トキヒコもミハ(上等の衣装)を賜りました。

クニツコ(80人のモノノへを束ねる役目のヒト)の5人はカミのミチを学びたいと、強く願うのでミヤコへの同行をお許しになりました。

39・59 帰路を、ニハリ(ニキネさんのゆかりのクニ)へと目指されます。ツカルのエミシからの捧げものの土産物は多くありました。カソ(カゾ、北海道)産のニシキ(錦の織物)がトハ(10反)。ワシ(鷺)のハのトカリ矢モモテ(100本)。また、ヒタカミ・ミチノクからはキカネ(黄金)10ヲ(ヲは重さの単位、詳細は未詳)。クマソの矢のモモテ(100本)を奉ってきました。

ミツルナビ

③ 「ヲ」の重さの単位のこと。200「ヲ」を4人の分け持ちで行軍出来るようです。一人で担げるのは多くても50kgほどが限度かと思われます。つまり、「ヲ」は最大で1kg程度か? あるいはその半分ぐらいの500g程度か? 担げる重量からの憶測です。

なお、カソミネ・ニシキは、北海道の錦織り物のことですね。アイヌの織物とは違います。平安時代ごろに移住してきたのがアイヌですから、温暖な気候の当時の北海道には、縄文時代からのヲシテ時代人が住まいしていたのでしょう。その織物は特別に美しかったのでしょうか。今は土器しか見つかっていませんが、そのうちには織物も発掘されると良いですね。

北海道を意味するカソヤカツは、25・57、34・38、39・59、24・106、24・106、35・6に  
典拠があります。

<sup>39・60</sup> 土産物の量は多く、200ラの重量がありまして、持ち運ぶにも重いものでした。  
背負って運ぶのは、4人のオオトモのサフライ（兵士、従者）です。代わる代わるに背負っ  
て運ぶのですが、重い荷物です。それを押してヤマトタケさんもトミ達もツクハ（筑波  
山）に登りました。深きゆかりのお山ですから。そして、ツサ（イサナギ、イサナミさん  
のミヤの場所か？）を経て、サカオリ（富士山南麓のミヤ）に至ります。さて、日も暮れて暗  
くなって足元もおぼつきません。タビ（松明）の用意が遅れたのです。それで、土産物を背  
負うサフライ（兵士、従者）は特に重さが身に堪えてきました。行軍が止まったら即座に疲  
れて眠る状態でした。ボヤキが始まります。

<sup>39・62</sup> 「疲れて、（日の）暮れも知らなかったな」

「そんなに言うなよ。4人での相持ちの仕事だろ。ナンチ（あなた）ばかりが疲れてる訳  
じゃない。チカラ（労力）を嫌がって厭うのであれば、ウタでも詠んだらどうだ」

ぶつくさ言い始めたサフライは答えます。

「カミ（遠い昔）のミヨ（うるわしい世）ならば優雅にウタもそうだろうがね。今は、チ  
カラ（体力）だよ」

<sup>39・63</sup> ヤマトタケのキミは、このやり取りをお聞きになりまして、ウタをお染めになって  
軍中に回覧なさいました。ツツウタのハツネ（連歌の初詠）にとお思いになられたのでし  
た。

舟舟⑩内卒卒△⑩□

にめはりつ ツクハお（を）

△舟卒△△舟⑩卒卒△

すぎて いくよかねつる

（10代ニニキネさまは、ニハリのミヤにて素晴らしい功績をお立てになりました。  
その、昔にはツクハ（筑波山）でのイサナギ、イサナミさまの所縁（ゆかり）も根付いてい  
たこともありました。幾代幾世の、昔からの功績が蓄積されていたことか！）

誰も、ウタを続けることが出来なかったうちに、ひとり、ヒトホシ・ヨスナが返しのウタ  
を詠みました。

⑩⑩△△卒舟舟⑩□□

かがなえて よにはこい

田△△舟⑩の△□⑩□

のよ ひには とおかお（を）

（日の目の当たるミヤ、日の目の当たりにくいミヤ、長男と次男とは生まれながらに差  
があるものです。よくよく考えてみまするに、ニニキネさまからの日陰の御世は9（こ）  
の世でした。そしてやっと10の世に至りまして、二朝廷の並立の時代から正式な統合の  
ヨ（世の中）になりました）

<sup>39・65</sup> ヤマトタケさんは、ヒトホシ・ヨスナをお褒めになられまして、タケタムラ【詳細  
は未詳】を治めるようにと、ヨスナはクニ（領地）を賜りました。また、他の人々にはハナ  
フリ（金銀のたぐいでしょう）をお配りになりました。オオト・モタケヒには、カヒ（甲  
斐）とスルカ（駿河）の二国のカミとしてお定めになりました。大きな功績をお認めになら  
れたのです。

ミツルナビ

③ 直訳的な意味だったら大したことありません。九日眠った。一〇日眠った。の意味ですね。何がどうしたの？

ヤマトタケさんのハラミヤマ（富士山）への登山の日には、行軍はお休みです。オオトモのサフライ（兵士）が、タケヒさんに問います。

「ウタの事があったので、ソロリに大きなお褒めがあったのだよ」  
サフライは更に聞きます。

タケヒは教えます。

ツツウタには、名歌として知られるサユリヒメ（ユリヒメ）のおウタがありました。サユリヒメさん19歳の時のおウタです。タケヒトキミ（神武天皇）のツホネ（お局）に上がっていたサユリヒメさんに、タキシミコが言い寄ってきたのでした。タキシミコ（タキシミ）はタケヒトキミのミコ（皇子、長男）です。

ミツルナビ

3969

○ 𠂇 卒 卒 帛 巾 内 巾 冏 厶

巾 冂 巾 ㊦ 巾 ㊧ 巾 ㊨ 巾 ㊩ 巾 ㊪ 巾 ㊫ 巾 ㊬ 巾 ㊭ 巾 ㊮ 巾 ㊯ 巾 ㊰ 巾 ㊱ 巾 ㊲ 巾 ㊳ 巾 ㊴ 巾 ㊵ 巾 ㊶ 巾 ㊷ 巾 ㊸ 巾 ㊹ 巾 ㊺ 巾 ㊻ 巾 ㊼ 巾 ㊽ 巾 ㊾ 巾 ㊿ 巾 ㊿

（今はトコ下がりだとは言え、アマキミのおキサキに上がった私です。あなた様とは、決して決して近づくことはご座いません。わたくしは避けます。メトル（嫁ぐ）の逆でルトメで御座います）

6

ス(ツズ)のウタと呼ぶようになります。繋がりを為すウタです。モノモ(100の連歌)なのでツズ(ツズ)と言います、ツツキ・ウタです」

<sup>39・72</sup> その場にいた、ナツカハキ(ナナツカハキ、子孫が後の高橋家、大善部、料理の職掌)が問います。

「ウタの継ぎはどのようにありますか？」

オオトモ・タケヒは答えます。

「80のウタが続いて詠まれます。

それは、1枚のウタミに8ウタが染め記されます。

初(はつ)は、「おいら」です。

次ぎ(2)は、「うけ」です。

みつ(3)は、「うたた」です。

よつ(4)は、「あわせ」です。

ゐつ(5)は、「ただごと」です。

むつ(6)は、「つれ」です。

なな(7)は、「つきつめ」です。

やつ(8)は、「つき」です。

こうして記したウタミに、これは表でして、裏にもまた同じように8のウタを染めて記します。裏には次のようになります。

<sup>39・74</sup> 初(はつ)は、「かしら」「おいら」です。<sup>5</sup>ラシテス、巡らしつらぬ。  
次(2)は、「うちうい」「うけ」です。

そして3の「うたた」をさって元に群がっていきます。【詳細は未詳】

それが、一連(ひとつら)ねの、16のウタです、1(ひと)オリ(折)と言います。これを、5(ぬ)オリ(折)詠み連ねます。(完成の連歌です)

<sup>39・75</sup> ヤン(80)のウタ(16×5=80)を、モノモ(100)とします。(お題の初めのウタがあるからです)それで、オリ(折)は一つがフン(20)のウタでして、ヒトオリの最後の19のオリトメのツズ(続きを為す)のあとはハタチ(ミハを立つ)と言います。オリハツのツズとも言います。

<sup>39・76</sup> オリトメのツズ(繋がりを為す)には、19、39、59、79、99の5つがあります。

39のツズは、「はな」と言います。

59のツズは、「やつめ」と言います。

79のツズは、「ふつめ」と言います。

99のツズは、「つくも」です。

<sup>39・77</sup> 一の5フシ(節)に句ってへる番りは、花のヨリです。サナリヒメのハナの香りですね。元歌(もとうた)はキミでして、尊きものです。その他の連なるウタはエタ(子供)やハツコ(子々孫々)のヤン(80、多くの)が続きゆく様に似ています。

なお、説明に漏れるところも多いので、深きミチのムネ(道理、原理)までも習い受ける  
と良いでしょう」

さらに、ナツカハキは問います。

<sup>39・78</sup> 「ヤン(80)をモノモ(100)とするのは、むじうの意味なのでしょうか？」  
タケヒは答えます。

「あなたのこの問いはカナメ(要所)を衝(つ)いていますね。

それは、元歌を含めて数える数字だからです。それぞれのオリの表裏の初めに元歌があります」

ナツカハキはまだ更に問います。

39・79

「ツツウタは、ユリヒメ（サユリヒメ）が最初に詠んだのですか?」  
タケヒは答えます。

「古くカミヨ（上代）にもあります。ミヤヤカミ（アマテルカミ）の「さすらても」のツツウタが最初です。これは55音の（内容提示歌）の形式の、頭韻5音、末尾5音の回りウタとしてのツツウタのラシテでした。（8・60、12・8）

㊦△ぬ弐母

㊦𐀓𐀓母㊦𐀓𐀓

さすらても はたれもはなけ

𐀓𐀓𐀓𐀓△

㊦𐀓𐀓△𐀓𐀓

みつたらす かかなすがも

𐀓𐀓𐀓𐀓𐀓

㊦𐀓𐀓𐀓𐀓𐀓𐀓

てたてつき かれのんてんも

㊦𐀓𐀓△

𐀓𐀓𐀓𐀓𐀓𐀓

あにきかす ひつきときみは

㊦㊦母𐀓𐀓△

あわもてらすや

また、ヒウカ（日向、九州）にタケヒトキミ（神武天皇）のおわしました際に、ヤマトチの流行の歌に、

田△𐀓𐀓𐀓𐀓𐀓𐀓

のりくたせ ほつまち

𐀓𐀓𐀓𐀓𐀓𐀓𐀓𐀓𐀓𐀓

ひろむ あまも いわふね

（ノリ（法の裁きの鉄槌）を下すべし ホツマチ（ニキネさんからの伝統のミチ）を広めてこそこれこそが あまもイワフネ（正統な祝いの船）です）

のウタが流行りました。シホツツラ（シホツツのラキナ、カナサキの子孫）も勧めまして、ヤマトウチに出版なさいまして、国家統一を成就なさいました。

39・81

このウタを詳しく見てみますと、オリカエに「ア・ヒ・ツ」が出ています。「アマ・ヒツギ・ツグベシ」の意味です。ウタの中心の「ひ」（10音目）「から3音目が「あ」です。「ひ」から3音戻ると「つ」があります。つまり、「アマ・ヒツギ・ツグベシ」と、意味しているのです。ナガスネを討ち、アスカミヤ（ニキハヤヒ）を統合する事を良しと為しているウタです。

39・82

ユリヒメ（サユリヒメ）の行方もツツ（憤みか?）でした、ウタもツツでして、マメ（アマキミを思う心）もミサホ（自らの清らかさのころ）も表われて十全です。ツツキウタを詠むノリとなったのでした。

さて、今こうして、ホツマ（ニキネさんの治世）の御世のまつりことのうつくしさが、再びの天下に通る実現に巡り会えました。ことごとくに全国がまつろう時となりまして、ウタ（ソロリが詠みました）はクニ（タケタムラ）を賜ります。チカラ（労力）にはアタヒ（対価、金銀）を賜ったのです」

ナツカハキや、サフライ（兵士）たちは、納得しました。



アカツチガメオオトキミニ

◎ ① 卒 吊 ②

柔回回中中中

手ナムオハ  
ハヤガオロ手ニ

𠂇  
⊕  
𠂇  
回  
ㄅ

③ 史系

カミコロス オトアシナツガ

① 糸田史△








メオコエハ ナムヒメマテハ

柔田書局

⊕  
、  
⊕  
⊕  
⊕  
⊕

28 アヤに詳しいです。

カミクラフ トキニソサノヲ

① 卅 卅 卅 卅 卅

中  
小  
大  
日  
月  
田  


コレオキリ ミオヤスカタト

田夾回巾內

マツルユエ　マタヤマスミノ

中卒少也









イクサウツハ（武具）はチチフヤマ（秩父山神社）に納め祭りました。ヲシロワケさんの42年（アスス829年）キサラキ（2月）8日の事でした。さらに、クニ巡りの全国へのすべてがまつろう形を成就した印しとして、「カク（日本固有種のミカン）」の力コ（籠）をやムネ【8本の立てモノの籠か？】に捧（ささ）げてコトをヲサメ（尊んで納める意味で、ワ行の中間なしの特殊ヲシテの「ヲ」が使われています）ます。ホツマ（二二キネさんの素晴らしい御世の再来）の世々の習わせとしてのお祭りです。

30092 ヤマトタケさんはミヤコへの帰路につかれます。ウス斗のサカ（神奈川県足柄下郡箱根町宮城野）に至ります。と、ヲトタチハナヒメの海が、ここを最後に見えなくなりま  
す。ヤマトタケさんは、海で別れてしまったヒメの事を思いつつ、キサ（東南）の方を望み  
見られます。ヲトタチハナヒメを思って、カタミの品になったウタミ（ウタを染め記した  
札）を取り出だして、お読みになります。

母 妻 母 妻 丹  
母 田 田 田 申 來

さねさねし さがむのおのに

母 亼 𠂇 冂 田 回 ㊦ ① 卅 𠂇 𠂇 𠂇

もゆるひの ほなかにたちて

單 𠂇 𠂈 𠂉 𠂊 𠂋 𠂌 𠂍 𠂎 𠂏 𠂐 𠂑 𠂒 𠂓 𠂔 𠂕 𠂖 𠂗 𠂘 𠂙 𠂚 𠂛 𠂜 𠂝 𠂞 𠂟 𠂠 𠂡 𠂢 𠂣 𠂤 𠂥 𠂦 𠂧 𠂨 𠂩 𠂪 𠂫 𠂬 𠂭 𠂮 𠂯 𠂰 𠂱 𠂲 𠂳 𠂴 𠂵 𠂶 𠂷 𠂸 𠂹 𠂺 𠂻 𠂼 𠂽 𠂾 𠂿 𠃀 𠃁 𠃂 𠃃 𠃄 𠃅 𠃆 𠃇 𠃈 𠃉 𠃊 𠃋 𠃌 𠃍 𠃎 𠃏 𠃐 𠃑 𠃒 𠃓 𠃔 𠃕 𠃖 𠃗 𠃘 𠃙 𠃚 𠃛 𠃜 𠃝 𠃞 𠃟 𠃠 𠃡 𠃢 𠃣 𠃤 𠃥 𠃦 𠃧 𠃨 𠃩 𠃪 𠃫 𠃬 𠃭 𠃮 𠃯 𠃰 𠃱 𠃲 𠃳 𠃴 𠃵 𠃶 𠃷 𠃸 𠃹 𠃺 𠃻 𠃼 𠃽 𠃾 𠃿 𠄀 𠄁 𠄂 𠄃 𠄄 𠄅 𠄆 𠄇 𠄈 𠄉 𠄊 𠄋 𠄌 𠄍 𠄎 𠄏 𠄐 𠄑 𠄒 𠄓 𠄔 𠄕 𠄖 𠄗 𠄘 𠄙 𠄚 𠄛 𠄜 𠄝 𠄞 𠄟 𠄠 𠄡 𠄢 𠄣 𠄤 𠄥 𠄦 𠄧 𠄨 𠄩 𠄪 𠄫 𠄬 𠄭 𠄮 𠄯 𠄰 𠄱 𠄲 𠄳 𠄴 𠄵 𠄶 𠄷 𠄸 𠄹 𠄺 𠄻 𠄼 𠄽 𠄾 𠄿 𠅀 𠅁 𠅂 𠅃 𠅄 𠅅 𠅆 𠅇 𠅈 𠅉 𠅊 𠅋 𠅌 𠅍 𠅎 𠅏 𠅐 𠅑 𠅒 𠅓 𠅔 𠅕 𠅖 𠅗 𠅘 𠅙 𠅚 𠅛 𠅜 𠅝 𠅞 𠅟 𠅠 𠅡 𠅢 𠅣 𠅤 𠅥 𠅦 𠅧 𠅨 𠅩 𠅪 𠅫 𠅬 𠅭 𠅮 𠅯 𠅰 𠅱 𠅲 𠅳 𠅴 𠅵 𠅶 𠅷 𠅸 𠅹 𠅺 𠅻 𠅼 𠅽 𠅾 𠅿 𠆀 𠆁 𠆂 𠆃 𠆄 𠆅 𠆆 𠆇 𠆈 𠆉 𠆊 𠆋 𠆌 𠆍 𠆎 𠆏 𠆐 𠆑 𠆒 𠆓 𠆔 𠆕 𠆖 𠆗 𠆘 𠆙 𠆚 𠆛 𠆜 𠆝 𠆞 𠆟 𠆠 𠆡 𠆢 𠆣 𠆤 𠆥 𠆦 𠆧 𠆨 𠆩 𠆪 𠆫 𠆬 𠆭 𠆮 𠆯 𠆰 𠆱 𠆲 𠆳 𠆴 𠆵 𠆶 𠆷 𠆸 𠆹 𠆺 𠆻 𠆼 𠆽 𠆾 𠆿 𠇀 𠇁 𠇂 𠇃 𠇄 𠇅 𠇆 𠇇 𠇈 𠇉 𠇊 𠇋 𠇌 𠇍 𠇎 𠇏 𠇐 𠇑 𠇒 𠇓 𠇔 𠇕 𠇖 𠇗 𠇘 𠇙 𠇚 𠇛 𠇜 𠇝 𠇞 𠇟 𠇠 𠇡 𠇢 𠇣 𠇤 𠇥 𠇦 𠇧 𠇨 𠇩 𠇪 𠇫 𠇬 𠇭 𠇮 𠇯 𠇰 𠇱 𠇲 𠇳 𠇴 𠇵 𠇶 𠇷 𠇸 𠇹 𠇺 𠇻 𠇼 𠇽 𠇾 𠇿 𠈀 𠈁 𠈂 𠈃 𠈄 𠈅 𠈆 𠈇 𠈈 𠈉 𠈊 𠈋 𠈌 𠈍 𠈎 𠈏 𠈐 𠈑 𠈒 𠈓 𠈔 𠈕 𠈖 𠈗 𠈘 𠈙 𠈚 𠈛 𠈜 𠈝 𠈞 𠈟 𠈠 𠈡 𠈢 𠈣 𠈤 𠈥 𠈦 𠈧 𠈨 𠈩 𠈪 𠈫 𠈬 𠈭 𠈮 𠈯 𠈰 𠈱 𠈲 𠈳 𠈴 𠈵 𠈶 𠈷 𠈸 𠈹 𠈺 𠈻 𠈼 𠈽 𠈾 𠈿 𠉀 𠉁 𠉂 𠉃 𠉄 𠉅 𠉆 𠉇 𠉈 𠉉 𠉊 𠉋 𠉌 𠉍 𠉎 𠉏 𠉐 𠉑 𠉒 𠉓 𠉔 𠉕 𠉖 𠉗 𠉘 𠉙 𠉚 𠉛 𠉜 𠉝 𠉞 𠉟 𠉠 𠉡 𠉢 𠉣 𠉤 𠉥 𠉦 𠉧 𠉨 𠉩 𠉪 𠉫 𠉬 𠉭 𠉮 𠉯 𠉰 𠉱 𠉲 𠉳 𠉴 𠉵 𠉶 𠉷 𠉸 𠉹 𠉺 𠉻 𠉼 𠉽 𠉾 𠉿 𠊀 𠊁 𠊂 𠊃 𠊄 𠊅 𠊆 𠊇 𠊈 𠊉 𠊊 𠊋 𠊌 𠊍 𠊎 𠊏 𠊐 𠊑 𠊒 𠊓 𠊔 𠊕 𠊖 𠊗 𠊘 𠊙 𠊚 𠊛 𠊜 𠊝 𠊞 𠊟 𠊠 𠊡 𠊢 𠊣 𠊤 𠊥 𠊦 𠊧 𠊨 𠊩 𠊪 𠊫 𠊬 𠊭 𠊮 𠊯 𠊰 𠊱 𠊲 𠊳 𠊴 𠊵 𠊶 𠊷 𠊸 𠊹 𠊺 𠊻 𠊼 𠊽 𠊾 𠊿 𠋀 𠋁 𠋂 𠋃 𠋄 𠋅 𠋆 𠋇 𠋈 𠋉 𠋊 𠋋 𠋌 𠋍 𠋎 𠋏 𠋐 𠋑 𠋒 𠋓 𠋔 𠋕 𠋖 𠋗 𠋘 𠋙 𠋚 𠋛 𠋜 𠋝 𠋞 𠋟 𠋠 𠋡 𠋢 𠋣 𠋤 𠋥 𠋦 𠋧 𠋨 𠋩 𠋪 𠋫 𠋬 𠋭 𠋮 𠋯 𠋰 𠋱 𠋲 𠋳 𠋴 𠋵 𠋶 𠋷 𠋸 𠋹 𠋺 𠋻 𠋼 𠋽 𠋾 𠋿 𠌀 𠌁 𠌂 𠌃 𠌄 𠌅 𠌆 𠌇 𠌈 𠌉 𠌊 𠌋 𠌌 𠌍 𠌎 𠌏 𠌐 𠌑 𠌒 𠌓 𠌔 𠌕 𠌖 𠌗 𠌘 𠌙 𠌚 𠌛 𠌜 𠌝 𠌞 𠌟 𠌠 𠌡 𠌢 𠌣 𠌤 𠌥 𠌦 𠌧 𠌨 𠌩 𠌪 𠌫 𠌬 𠌭 𠌮 𠌯 𠌰 𠌱 𠌲 𠌳 𠌴 𠌵 𠌶 𠌷 𠌸 𠌹 𠌺 𠌻 𠌼 𠌽 𠌾 𠌿 𠍀 𠍁 𠍂 𠍃 𠍄 𠍅 𠍆 𠍇 𠍈 𠍉 𠍊 𠍋 𠍌 𠍍 𠍎 𠍏 𠍐 𠍑 𠍒 𠍓 𠍔 𠍕 𠍖 𠍗 𠍘 𠍙 𠍚 𠍛 𠍜 𠍝 𠍞 𠍟 𠍠 𠍡 𠍢 𠍣 𠍤 𠍥 𠍦 𠍧 𠍨 𠍩 𠍪 𠍫 𠍬 𠍭 𠍮 𠍯 𠍰 𠍱 𠍲 𠍳 𠍴 𠍵 𠍶 𠍷 𠍸 𠍹 𠍺 𠍻 𠍼 𠍽 𠍾 𠍿 𠎀 𠎁 𠎂 𠎃 𠎄 𠎅 𠎆 𠎇 𠎈 𠎉 𠎊 𠎋 𠎌 𠎍 𠎎 𠎏 𠎐 𠎑 𠎒 𠎓 𠎔 𠎕 𠎖 𠎗 𠎘 𠎙 𠎚 𠎛 𠎜 𠎝 𠎞 𠎟 𠎠 𠎡 𠎢 𠎣 𠎤 𠎥 𠎦 𠎧 𠎨 𠎩 𠎪 𠎫 𠎬 𠎭 𠎮 𠎯 𠎰 𠎱 𠎲 𠎳 𠎴 𠎵 𠎶 𠎷 𠎸

とひしきみはも

300・93 ヒメの残したウタを三度（みたび）お読みになりました、「あつま あわや（我が妻は天・地にと還ってしまったか！）」と嘆かれるのでした。各地に残る、アツマ（吾妻）の地名の元になりました。

30994 オイワケ（それぞれに、各地への帰りの詣での別け歩み）のために、キヒ（吉備）・タケヒコはコシ（越後・越中・越前）の手（道）を行います。クニのサカシラ（反抗心の有無）の調査にと使わしめたのです。

オオトモ・タケヒは、サカム（相模）から早めにミヤコに戻ります。取り急ぎの報告と、東北のエミシからの土産物を届けるためです。ミカド（スヘラギのヲシロワケさん）

に、すべてヒタカミ、ツカルまでもの、まつろふ事の成就を申し上げる報告がなされました。カミヨの、ようにとの麗しい縄文日本の国家の再確認です。

39-9-11 ヤマトタケさんは、供の重臣とはなれて、深い山の道を歩まれました。シナノ（信濃）のキノチ（木曾路）です。今にも、大変な山高い路行きです。ツツラオリです。谷は、霧に雲に微（かす）かに見えるばかり、幾重にも曲がりくねった道です。急峻な山道のフーフツする架け橋の強度は、ムマ（馬）の重量も橋を渡るにも耐えられません。険しい山の中の道は、雲の中の見えない道を分けて、何とか歩む行軍での連続で飢えて疲れるばかりです。

39-9-7 その内の、事に、山中での食事の際の事でして、シカ（鹿）が、それも白い鹿が現れました。そして、息をせって吐いて苦しんでいます。ヤマトタケのキミは、哀れに思われました。ヒル【葦か？ 詳細は未詳】をひとつ弾かれまして、シラカ（白鹿）のマナコ（目）に当てられまして、撃ち殺しになりました。（目つぶしの意味か？）

なおなお、雲は蔽い、道は不確かです。そこで、「ヒ・ミツのハラヒ」を、三度に祈られます。シナトのカセに、クモ（雲）は吹き払われます。不思議なことに、カミ【詳細は未詳】の白いイヌ（犬）が現れましてミノ（美濃）の土地にと、出で入る事が出来ました。

キヒ（吉備）・タケヒコも、コシ（越後・越中・越前）の道の巡行から巡って、ここにヤマトタケさんに会うことが出来ました。

39-9-9 ほっと、なさったヤマトタケさんでした。そして、語られます。

「先に、キノチ（木曾路）にラエ（病気）にて臥すも、ハラヒて、これをマヌガル（免れる）。シカ（鹿）のチ【詳細は未詳】には、ヒル（蕨、ニラやノビルなどの類）をカミ（髪か？）に塗れば、ザガイキ（災いをもたらすイキ）に当たることは無い」と、ヤマトタケさんはおっしゃいますのでした。